様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０３０３８

研究課題名（和文）巨大城下町江戸近郊の分節的な地帯構造と民衆世界

研究課題名（英文）World populace of the outskirts of Edo, a segmental analysis

研究代表者
吉田　伸之（Yoshida, Nobuyuki）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・名誉教授

研究者番号：４００９２３７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、江戸南部近郊の荏原郡東半域に相当する品川領と六郷領を対象に、当該地帯臨海部における分節的な社会=空間を把握し、そこでの民衆世界の存立構造を把握しようとする試みである。ここでの成果は以下のようである。（１）南品川宿から隣村大井村、品川猟師町、東海道沿いの街村域、臨海部海付村落、さらには多摩川河口部の八幡塚村や羽田村などの検討素材について、史料の所在状況の把握と一部史料の収集を図った。（２）臨海部海付村落の中で、特に三大森村を中心に、海苔生産の進展や、加工・流通構造の様相を解明し、併せて、幕末から近代における展開動向を見通し、その歴史的特質を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
この研究は、これまで専ら都市域内部に視野が限定されてきた巨大都市江戸の周縁部や郊外に注目し、都市と周縁域との関係を歴史的に把握するための前提として、その社会=空間構造を分節的に把握しようとする試みである。今回、特に解明を進めた臨海部海付村落における海苔生産や貝類採取の問題は、これまで巨大都市江戸との関係において論ぜられることは稀であり、江戸周辺部の社会=空間構造分析の持つ射程についての問題提起となった。また、臨海部における海苔場所が高度経済成長期にほぼ消滅し、大半は埋立地となって現代都市インフラの一部を構成するに至ったが、その歴史的意味合いを考える素材を提供することができた。

研究成果の概要（英文）：This project examined the segmental socio-spatial structure of the coastal regions of eastern Ebara County, an area on Edo’s southern outskirts spanning Shinagawa and Rokugo districts. Its results are as follows. First, we determined the location and began collecting extant documents from the following communities: the Minami Shinagawa Post Station and neighboring Ohi Village, Shinagawa’s Ryoshicho town, the urbanized villages lining the Tokaido Highway, coastal villages on the western side of present-day Tokyo Bay, and villages near the mouth of the Tama River, including Hachimanzuka and Haneda Villages. Second, it elucidated the structure of relations supporting early modern seaweed production, processing, and distribution in Ohmori Village and other coastal hamlets, while also analyzing how that structure developed from the late-Edo period to the early-Meiji period.

研究分野：日本近世史

キーワード：地帯構造　分節構造　社会=空間構造　身分的周縁　全体史　「日用」層　巨大都市近郊　海面利用

１．研究開始当初の背景

吉田は、基盤研究(C))「近世品川宿村の分節的な社会=空間構造に関する基礎的研究」（2013年～2015年度）において、江戸南端に隣接し、一部が江戸町方に包摂される「品川宿村」に注目し、江戸近郊の地帯構造分析に初めて本格的に着手した。そこでの成果を踏まえ、巨大城下町江戸近郊地帯の内、特に南部の旧荏原郡東半域に相当する品川領・六郷領に注目し、当該地帯の分節的な社会=空間構造の特質を検討し、これら周縁部社会の基底部に展開する民衆世界の位相を見、併せてそこでの多様な諸集団の存在形態を明らかにすることを、次なる課題として掲げるに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本近世最大の巨大城下町であった江戸の近郊地帯の中で、特に旧荏原郡の品川領・六郷領に注目し、これら地帯における分節的な社会=空間構造（地帯構造）の特質を解明し、当該社会において民衆世界がいかなる位相にあるかを確認しながら、地帯構造の全体史叙述を実践するうえで確固とした基盤を構築することとした。特に、以下の４つを個別課題として設定した。

a　南品川宿から大井村の社会=空間構造。
b　品川猟師町や周辺部の海苔生産を軸とする臨海部地帯の社会構造。
c　東海道という「街道」沿いを稼場とする渡世集団の性格。
d　多摩川河口域の八幡塚村・羽田猟師町など、「川」の流域縁辺部をめぐる社会=空間構造。

また、併せて江戸の他の近郊地帯、大坂・京都の近郊部、さらには近世パリなどとその周辺地帯などとの比較類型把握を試みようとした。

３．研究の方法

(1)　本研究の実施に際して、次の三つを主要な方法とした。

①　地帯構造論　これは近世の地域を町や村に限定し、それらの複合によって構成される一定の広がりを有す社会=空間を地帯と呼んで、その全体像を把握しようとする方法である。ここで取り上げる荏原郡の品川領・六郷領などは、江戸湾＝海、東海道＝道路、多摩川＝流域などをめぐる諸関係によって構造化される点で特徴的であり、地帯構造論にとって好個な素材である。

②　分節構造論　二宮宏之氏によるソシアビリテ論や塚田孝氏による「重層と複合」論などを踏まえて提起した、伝統社会における秩序構造分析の方法・視点である。これは社会を多元的に構成する共同体や共同組織、あるいは身分集団などの諸要素が、公権力や社会的権力によって如何に構造化されるかを、そこに内包される諸矛盾とともに動態的に把握しようとするものである。

③　比較類型把握　これは、吉田が研究代表者を務めた基盤研究(S)「伝統都市の分節的な社会=空間構造に関する比較類型論的研究」（2006年～2010年度）において提起した方法で、異種的な伝統社会相互を、その基礎にある分節的な社会構造や所有の諸形態に注目しつつそれぞれの実態を相互比較し、新たな論点を抽出しようとするものである。

(2)　本研究ではこれら①～③の方法を基礎として、次の三つを主要な作業課題として取り組むこととした。

①　基礎史料の調査・収集：史料群の所在調査と概要調査。品川歴史館・大田区立郷土博物館・東京都公文書館・慶応義塾大学・川崎市民ミュージアム・国立国会図書館・東京都立中央図書館などが所蔵する品川領・六郷領関係の史料について撮影により収集すること。

②　「研究の方法」で掲げた４つの個別課題をめぐり、それぞれオリジナルな実証研究を推進し、報告・講演・論考・著作などで成果を適宜公表し、広く発信すること。

③　ここでの事例研究を、江戸近郊の他地帯、大坂・京都や諸城下町の都市近郊、あるいはパリやリールなどフランスなど海外の類似例等、国内外の伝統都市近郊域の地帯構造と相互に比較類型的に検討し、論点の深化をはかること。

４．研究成果

(1)　主要な成果

本研究では、「研究の目的」に掲げた個別課題a～dに即して、年次毎に重点を設けて研究を実施した。その中で、特にb品川猟師町や周辺部の海苔生産を軸とする「海」の社会構造に関する史料収集や分析が最大の作業となった。史料としては、「武州羽田海苔場願書外十五種」全十五冊、旧北大森村野口家文書、橘樹郡小田村文書などを中心に、臨海部村落をめぐる海苔や貝類など関係史料の博捜に努めた。これらの研究成果は、韓国釜慶大学校・海洋人文学研究所主催の国際学術大会や、Yale University CEAS 主催シンポジウム“The Meiji Restoration and its Afterlives: Social Change and the Politics of Commemoration”で講演・報告した。その後、これら講演や報告内容を踏まえて、塚田孝、ダニエル・ボツマン、吉田伸之編『「明治１５０年」で考える―近代移行期の社会と空間』の収録論考「海辺の近代化」（論考A)、「巨大城下町近郊地帯の海面秩序」（論考 B。吉田伸之編『シリーズ三都　江戸巻』東京大学出版会、２０１９年５月刊行予定）の二つの論考にまとめた。それらの概容は次のようである。

(2)　二つの論考

①論考Aは、幕末維新期における品川から羽田に至る臨海地帯をとりあげ、その海面部分に展開した商品生産、特に海苔の生産と流通に注目した。そして18世紀後半から急激に拡大する海苔生産の場ー海苔場所ー が、19世紀初めに三大森村を軸に圧倒的な規模に達し、江戸商人との対抗関係のもと、当該地帯の秩序構造の基盤をなしたことを明らかにした。また、隣接する羽田村（羽田猟師町・鈴木新田を含む）との海苔生産をめぐる相剋の諸局面と明治初年への展開を辿った。
②論考Bは、論考Aの前提となる時期を扱った基礎研究である。そこでは、荏原郡臨海部村々における海産物＝商品生産として、貝類と海苔の二つを取り上げた。まず、漁業村落にのみ許される沖合の漁業から排除された海付村落において、臨海部から、田畑向けの肥料として貝類や藻草（海苔）の採取を公認されたところに、これらの商品化の起点を見た。就中こうした商品化は、江戸のような大都市近郊において一段と有力な条件を構成する。
　その中でまず貝類は、江戸むけの海産物として食用に消費されるのみでなく、貝殻が廃棄されず石灰の原料として販売される点を指摘した。つまり貝類は「二度売られる」点に特質を持つのである。
　また藻草は18世紀に、加工された保存商品＝海苔として急浮上し、品川から大森にかけての臨海部海面に生産点＝海苔場所が拡大していった。これらの海苔は「浅草海苔」というブランドを得て、将軍家への献上御用に供されることで特産品となり、江戸名産となってゆく。そして海苔場所は１８世紀末から１９世紀にかけて大規模に展開し、その採取・加工・流通を担う生産と分業のシステムが、江戸問屋のヘゲモニーの下で確立してゆく。一方、産地においては、その中心となった三大森村と、品川村、あるいは糀谷村、さらには羽田村との間で争論が絶えない様相を見た。こうして、臨海部海付村落においては、海苔や貝類の生産が、隣接する江戸という巨大消費市場に拘束され、その存立を大きく規定されることを見通した。
(3)その他の成果
①個別課題a・cにむけての基礎作業として、『品川町史』全３巻（品川町編、1932年刊）収録史料のデータ化を完成させた。『品川町史』全３巻は戦前期に刊行された優れた自治体史編纂物であるが、そこに豊富に収録される近世・近現代史料は、その後の『品川区史』編纂（１９７１～１９７６年）に際してその多くについて原本が見出せないなど、きわめて貴重なものとなっている。このために、当該地帯の研究の基礎データとして、町史収録史料の全データをエクセルに摘記することは重要な課題であった。本研究ではこの成果物を品川歴史館にも献呈し、今後の研究上の便宜を図った。
②本研究で方法的な基軸とした、近世の巨大都市江戸近郊における地帯構造論の特質について比較類型的に把握することも併せて試みた。このために大坂・京都などの巨大都市、あるいは飯田・土浦などの城下町、さらには大津・下市（大和）などの諸都市近郊地帯に関する研究動向や史料の所在状況を確認し、また下記のような史料調査を各地で実施、あるいは参加するなど、それぞれの地帯構造に関する比較類型把握に努めた。長野県下伊那郡阿智村清内路土佐屋文書・松屋文書など、茨城県土浦市飯田酒井家文書、滋賀県野洲市小澤家文書、奈良県吉野郡小路梅本家文書。また、海外の事例との比較類型把握の面では、2017年5月にはアンシャン・レジーム期の都市リールにおける軍隊と社会に関する報告を得、都市と周縁部に関する地帯構造分析の意義をめぐる議論を深めた（東京外国語大学海外事情研究所“Quadrante”No.21,2019所収のカトリーヌ・ドニ論文「付記」を参照）。
③これらの研究を遂行する過程において、武州荏原郡六郷領の中心的な位置にある八幡塚村・鈴木家文書の再整理と分析が重要な作業課題として浮上した。八幡塚村は東海道が多摩川を渡る六郷渡しに隣接する街道の要衝であり、また多摩川河口域にあって、上流からの筏や筏荷を扱う河川舟運の拠点でもあった。そこの旧家である鈴木家文書は、当該地帯の構造分析にとって極めて重要な素材である。その多くはすでに『大田区史　史料編　諸家文書』に収録されているが、まだ未翻刻部分を残している。本研究における成果を継承する上で検討課題であることを確認した。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計４件）
① 吉田伸之「能真坊野と平川村」『千葉いまむかし』査読有、３２号、２０１９年、１３-２６頁
② 吉田伸之「歴史遺産と地域連携―飯田・下伊那での実践から」『歴史評論』査読有、８２２号、２０１８年、５-１５頁
③ Yoshida Nobuyuki et Tsukada Takashi “Reflexions sur le statut de bourgeois a Edo et Osaka au XVIIe siècle”、２０１７年、８０-１０６頁
④ 吉田伸之「「御城米」と江戸の湊」『都市史研究』査読無、３号、２０１６年、８２-９１頁

〔学会発表〕（計４件）
① 吉田伸之「町奉行所市中取締掛と幕末期の江戸社会」上海社会科学院歴史研究所「中日城市史研究与比較」学術研討会、２０１８年
② 吉田伸之「巨大都市江戸近郊の海辺と社会」韓国釜慶大学校・海洋人文学研究所国際学

術大会、２０１７年
③　Yoshida Nobuyuki「海辺の近代化―江戸（東京）近郊地帯を例として」Yale University CEAS “The Meiji Restoration and its Afterlives: Social Change and the Politics of Commemoration”、２０１７年
④　Yoshida Nobuyuki “The social=spacial structure of the chonin districts of Edo and the topology of plebeian lifeworlds” Council on East Asian Studies, Yale University、２０１７年

〔図書〕（計４件）
① 塚田孝、ダニエル・ボツマン、吉田伸之編『「明治１５０年」で考える―近代移行期の社会と空間』山川出版社、２０１８年、２６０頁
② 吉田伸之編『山里清内路の社会構造―近世から現代へ』山川出版社、２０１８年、３８２頁
③ 吉田伸之ほか（共著）『日本近世史研究と歴史教育』山川出版社、２０１８年、２９-６０頁
④ 後藤雅知、吉田伸之編『古文書でよむ　千葉市の今むかし』崙書房出版、２０１６年、２６０頁

６．研究組織
(1)研究分担者
研究分担者氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。